

受験番号

広島市立看護専門学校 第一看護学科

令和四年度推薦入学試験問題

「国語」

【試験上の注意：答えはすべて解答用紙に記入すること】

一 次の文章を読んであとの問いに答えよ。

下川正謡会の本番が終わる。

社中のわれわれにとっては「一年で一番長い日」である。楽屋でドクター佐藤とお茶を飲みながら、「どうして、オレたち、こんなに苦しいことを自腹切つてまでやってんだろ」と顔を見合わせる。

舞囃子で能舞台に立つことの **I** に比べたら、学会発表なんか、何でもないですからねとドクターが答える。

ほんとに。これに比べたら、講演とか学会発表とか、ピクニックみたいなもんだね。

A、そういう訳か。

(1) 人間は同時に二つの苦しみを苦しむことができない。

私は前に激しい(a)胃痙攣の発作を起こしたとき(わさび漬をアテに白ワインを飲んだのである)、廊下のドアにしたたかに顔面を打ち付けて顔の半分を紫色に腫れ上がらせたことがあるが、このときも胃痙攣の発作が治まるまで、顔に痛みがあることに気づかなかった。

そういう訳なのだ。

われわれは年に一度この舞囃子の舞台というものがあって、そのストレスで胃に穴があくような思いを一年中している(ストレスが消えるのは本番のあとの一週間ほどだけである)。そのストレスがあまりに苦しいので、その他のストレスフルな出来事が(よく考えてみたらたくさんある)どれも「舞囃子の苦しみに比べたら、屁のカップ」に思えてしまうのである。

舞台上で道順がわからなくなったときの絶望感に比べたら、講演で **II** ことなど冗談のようなものである。「あれ、オレ何しやべってたんだっけ？」と言って笑いをとることが講演では許されるが、舞台上で「センセイ、これからどうすんだっけ？」と訊いたりすることは天地がひっくり返っても許されないのである。

詰める歩数が違うと叱られ、拍子の間が悪いと叱られ、目付が低いと叱られ、舞扇の角度が違うと叱られるという、文字通り「一挙手一投足が規矩に従っている」という状態を達成しなければ舞というのは成り立たない。私のようにふだんからちやらちやらと好き放題にしている人間にとって、これがどれほど(b)苛酷な試験であるかはよくよくご理解いただけるであらう。

B、これだけストレスフルな経験でありながら、舞台上でどのような失敗をしようと恥をかこうと、それは私どもの実生活には何の関係もないのである。

私たちの失敗や不出来は誰にも迷惑をかけない。

そこで命を取られることもないし、失職することもないし、(c)減俸されることもないし、家族や友人の信頼や愛を失うこともない。

何のⅢもないのである。

これほどのストレスが加圧されていながら、失敗しても何のペナルティもないのである(下川先生は本番前はこちらの体温が下がるほどに手きびしいが、本番終了後は決して過去を振り返らず「はい、首尾ようおできになりましたな」と水に流して、もう来年の話に入るのである)。

変でしょ。

Ⅳ 装置である。

昔の男たちは「 」をよくした。

夏目漱石や高浜虚子は宝生流の謡を稽古していた。山縣有朋は井上通泰に短歌の指導を受けた。内田百閒は宮城道雄に就いて箏を弾じた。そのほか明治大正の紳士たちは囲碁将棋から、漢詩俳諧、義太夫新内などなど、実にさまざまなお稽古ごとに励んだものである。

植木等の歌に「小唄、ゴルフに碁の相手」で上役に取り入って出世するC調サラリーマンの姿が活写されているが、一九六〇年代の初めまで、日本の会社の重役たちは三種類くらいの「お稽古^{まよ}ごと」は嗜^{たよ}んでおられたのである。

なぜか。

私はその理由が少しわかりかけた気がする。

それは(2)「本務」ですぐれたパフォーマンスを上げるためには、「本務でないところで、失敗を重ね、叱責され、自分の未熟を骨身にしみるまで味わう経験」を積むことがきわめて有用だということが知られていたからである。

本業以外のところでは、どれほどカラフルな失敗をしても、誰も何も咎めない。そして、まことに玄妙なことであるが、私たちが「失敗する」という場合、それは事業に失敗する場合も、研究に失敗する場合も、結婚生活に失敗する場合も、「失敗するパターン」にはVがある、ということである。

私はこれまでさまざまな失敗を冒してきたが、そのすべては「いかにもウチダがしそうな失敗」であった。「ウチダがこんな失敗をするとは信じられない」というような印象を人々に残すような失敗というものを私はこれまで一度もしたことがない。すべての失敗にはくろぐろと私固有の「未熟さ」の(d)刻印が捺されている。

C、私たちは「自分の失敗のパターン」について、できるかぎり情報を持っておくべきなのである。そして、その を学ぶためには、「きわめて失敗する確率の高い企て」であるにもかかわらず、どれほどスペクタキュラーな失敗をしても「ペナルティがない」という条件が必要なのである。

「失敗する確率が高い」のはそのときに私たちの思考や運動の「Ⅵ」が下がるからである。

D、「精度」と「自由度」は相関するので、思考・運動の自由が抑制される条件を課されさえすれば、私たちは(3)システマティックに失敗する。

「お稽古ごと」というのは無数の「約束事」(どうしてそういう決まりがあるのか、その起源について誰も知らないような)で編み上げられているのだが、それはそうしておくとして、「初学者はおもしろいように失敗する」からである。

素人がお稽古することの目的は、驚かれるかもしれないが、その技芸そのものに上達することではない。

私たち「素人」がお稽古ごとにおいて目指している「できるだけ多彩で多様な失敗を経験することを通じて、おのれの未熟と不能さの構造について学ぶ」ことである。

それは玄人と目指すところが違う。

玄人は失敗すれば職を失い、(e)路頭に迷う可能性があるけれど、素人はそれが無い。私たち素人が玄人に対して持っている「アドバンテージ」はまさにそれだけなのである。

(4) 「それだけ」だとすれば、「それこそ」がお稽古ごとすべてに貫流する教化的な要素だということとは論理的に推論せらるるのである。

(出典：内田樹「失敗の効用」『邪悪なものの鎮め方』バジリコ株式会社)

問一 空欄 I VI に入れるのに最も適当な語を、次の (ア) (イ) (エ) の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

空欄 I	(ア) プレス	(イ) ストレス	(ウ) テンション	(エ) ウェイト
空欄 II	(ア) 省略する	(イ) 空すべりする	(ウ) 絶句する	(エ) 立ち止まる
空欄 III	(ア) 実害	(イ) 不幸	(ウ) 推移	(エ) 混乱
空欄 IV	(ア) 異常な	(イ) 絶妙な	(ウ) 意外な	(エ) 不思議な
空欄 V	(ア) 同一性	(イ) 平等性	(ウ) 平均性	(エ) 統一性
空欄 VI	(ア) 熱量	(イ) 反応速度	(ウ) 精度	(エ) レベル

問二 空欄 A D を補うのに最も適当な語を、次の (ア) (イ) (オ) の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

(ア) しかも (イ) だからこそ (ウ) また (エ) しかるに (オ) それで

問三 傍線部 (1) 「人間は同時に二つの苦しみを苦しむことができない」とあるが、それはどういうことか。筆者の能舞台の体験と関係させながら、説明せよ。

問四 波線部 (a) (e) の語の読みを記せ。

問五 空欄 a に入る言葉を、それぞれ本文中から抜き出せ。

問六 傍線部 (2) 「本務」ですぐれたパフォーマンスを上げるためには、「本務でないところで、失敗を重ね、叱責され、自分の未熟を骨身にしみるまで味わう経験」を積むことがきわめて有用だということ」とあるが、それはどういうことか。簡潔に説明せよ。

問七 傍線部 (3) 「システマティック」の意味として相応しいものを、次の (ア) (イ) (エ) の中から一つ選んで符号で書け。

(ア) 必然的 (イ) 数式的 (ウ) 組織的 (エ) 確率的

問八 傍線部 (4) 「それだけ」だとすれば、「それこそ」がお稽古ごとすべてに貫流する教化的な

要素だということは論理的に推論せらるるのである」とあるが、「それ」の内容を具体的に示しながら簡潔に説明せよ。

二 次の文章にある傍線部のカタカナ表記を、漢字に改めよ。

常子^{つねこ}は藤宮先生から熊野の旅のお伴を仰せつかったとき、しんからおどろいた。

十年にわたって①シンペン^{シンペン}の面倒を見てもらった、その礼をしたいという思召しなのである。常子は四十五歳になる身寄りのない寡婦で、歌のお弟子として入門しつつ、折から手伝いの老婆を失って困っておられた先生のお世話をするようになったのであるが、この十年間、ただの一度も色めいたことはない。

常子はずっと美しい女でもなし、色気のある女でもない。実に地味な性格で、すべてに②ヒカ^{ヒカ}え目で、かりにも自分からかれこれのことをしてくれと人に要求できるような人柄ではない。結婚二年目に急死した良人とも、親類が強いて妻^{つま}わせた縁であつて、好きで一緒になったのではない。そんな女が歌を作るようになったのはふしぎなことだが、先生はそういう常子の人柄と、才能のなさをよく見きわめた上で、家へ入れる決心をされたらしいのである。

しかし③コンポン^{コンポン}の動機はあくまで常子の側の尊敬心にあり、藤宮先生ほどその尊敬の対象としてふさわしい人物はなかった。

藤宮先生は清明大学の国文科の主任教授で、文学博士で、また歌人としても知られていた。先生の古今伝授の研究は有名だったが、その研究の特色は、王朝文化の名残が、次第に④クウソ^{クウソ}に形式化してゆきながら、民間信仰とまざり合つて神秘の色を増し、徳川時代にいたって、神儒仏説混入のふしぎな伝授書まで生みだすにいたる径路の、貴族的な文化と民衆的な文化との、微妙な融け合いの解明にあつた。この研究は、最近十年は、源語伝授の研究に引きつがれ、王朝文学の先生の講義は、ともすると⑤イツダツ^{イツダツ}して、この神秘的な伝授の中世的な色調に染められるのであつた。

（出典：三島由紀夫『三熊野詣』『殉教』新潮文庫 二〇〇四年改版）